

井上馨

開明的ナショナリズム

堀雅昭著



(弦書房・2520円)

井上馨の功績は何か？ ころ訊かれて、即答できる人は多くはないかもしれない。条約改正や立憲制の確立、財政の健全化など井上の活動領域は幅広い。しかし、条約改正は陸奥宗光、立憲制確立は伊藤博文、財政健全化は松方正義などが功労者と考えられており、井上に対する評価はあまり高くない。おそらく、多くの人々が漠然と抱いているイメージは「西洋かぶれの欧化主義者」という程度ではないだろうか。井上は文明開化のイデオログ、鹿鳴館の建設や官庁集中計画など欧化政策の主導者と思われてきた。財閥との関係の深さから利権政治家という揶揄もつきまといつた。

本書はそうした先入観へのひとつの挑戦である。著者は、新資料の発掘や関係者への取材を通じて、井上馨から「欧化主義者」というレッテルを引き剥がそうと試みる。副題にある「開明的ナショナリズム」という野心的な概念を提起し、その実践者として井上を描く。「伝統を懐古する反動

的な思考としてナショナリズムを捉える立場からすれば、開明的ナショナリズムは語義矛盾のように響くかもしれない。しかし、著者は「開かれたナショナリズム」と「閉じられたナショナリズム」を対置し、井上が不平等条約の是正のために粉骨砕身し、日本の近代化の原動力となったことを強調する。国を閉じるのではなく、欧化政策を通じて国を開くことによって国家を強くする思想を「開明的ナショナリズム」として積極的に評価するのである。

無論、こうした井上の思想や理念が同時代の人々に受容されたわけではない。急進的な改革や変化は世間の反発を招き、頭山満率いる玄洋社など土着的ナショナリズムの格好の標的となった。だからこそ、井上は生涯を通じて「世外」と号したのかもしれない。世外とは「世の埒外」を意味する。華々しい政治の世界を歩み、数々の要職を歴任した井上の生涯を思えば意外な号だが、時代を外部の目で冷静に見つめ、格闘した井上の姿がそこに現れているのかもしれない。(九州大准教授・政治学 大賀哲)

ほり・まさあき 1962年
山口県生まれ。文筆家。著書に『中原中也と維新の影』など。

西日本新聞

2013.11.10.